

並行する時間を感じる建築 Architectural space to be conscious of parallel times

21319025 田嶋希里子
指導教員 宮晶子 准教授

時間 空間デザイン オフィスビル

1章 はじめに

1-1 研究背景と目的

建築空間を考えると、時間という要素は切っても切れない関係にある。なぜならば、私たちは時の流れがあつてはじめて空間を知覚することができるからだ。

本研究の発端は、私自身の電車に乗っている時の体験にある。電車は、他にはない独特な時間を感じさせる空間だと感じていた。それは、電車の規則正しく流れるような時間性が、乗客である個人の内在的な時間をより意識させるからではないかと考えた。

本研究では、私自身の体験を基に、オフィスビルの均質な時間を応用して、性質の違う多様な時間を感じることでできる建築空間の実現を目的とする。

1-2 現代の時間意識

時計が刻む時間によって行動がスケジュール化された近代以降の社会では、時計なしでは生活や社会そのものが立ち行かなくなってしまうほど、時計の刻む時間は必要不可欠で絶対的な存在である。さらに、現代の日本の社会のように発展しつづいた近代市民社会では、社会生活の隅々まで時計的に編成され、「時間に追われる」という感覚がより一層増していく傾向にある。

2章 時間について

2-1 アンリ・ベルクソンの哲学

時間について考えるとき、哲学者のアンリ・ベルクソンの考えを参考とする。ベルクソンによると、本当の時間はわたしたちの意識に直接与えられるものであり、それを「持続」という概念を用いて説明している。ベルクソンは時間の本来の性質について、さらには知覚と記憶について語っている。

2-2 時間についての分析・考察・定義

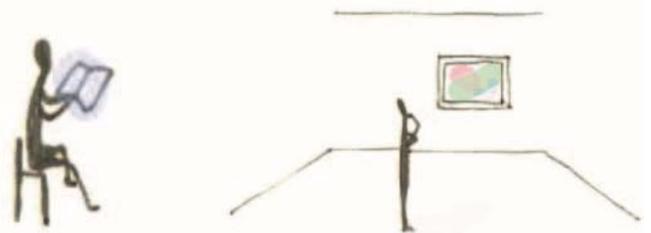
時間を次のような三つの性質を持つものと定義する。

- a、時計が刻む時間・相対化された時間
- b、太陽の動き・潮の満ち引きなど、自然の現象から構造を発見できる時間
- c、体感の時間・自分自身に流れる時間

これらの時間意識は、労働の仕方と密接に関わっている。aは、近代社会において最も発達した時間である。近代化によって企業や教育機関などさまざまなものが組織化され、それらが機能するために用いられた。また、明治初期に鉄道が導入されたことも、この時間感覚の定着に影響していると考えられる。

一方bの時間に即した生活を営んでいた近代以前の社会では、農耕が主な労働であったため、時計の分単位まで細かく編成された時間は必要なかった。最も重要だったのは、太陽の動きや季節の移り変わりなどの自然環境の変化からわかる時間の経過であった。

cの時間は、a,bの時間とは性質の異なる時間意識で、計測することも可視化することもできない。この時間は、常に私たちの中に流れているのだが、普段生活をおくる上では意識されておらず、ある瞬間にふとその存在に気付くものである。本を読んでいるときや作業をしているとき、美術館などで過ごす時間などを例に挙げるができる。



本を読んでいる時

美術館

図1 : cの時間を意識する瞬間

さらに a,b の時間と、c の時間が同時に認識される瞬間がある。冒頭で述べた、私が電車で体感したのもこれにあたる。このような二つの時間が同時に意識される感覚を、「性質の違う時間が並行して認識される感覚」と呼ぶことにする。外的な要素に影響されて、内在的な時間がより意識されるようになる。

3 章 設計プロセス

3-1 モデルの採集・分析

空間モデル採集建築空間の設計を行うにあたり、まず「性質の違う時間が並行して認識される感覚」の空間モデルの採集・分析を行った。お経を聞いているとき（木魚の音）やランニングをしているとき・電車のなかなどを例に挙げることができる。

また、これらの場面を分析すると、外在的な要素が、等速で流れるもの・等間隔で区切られるものであるという特徴があることがわかった

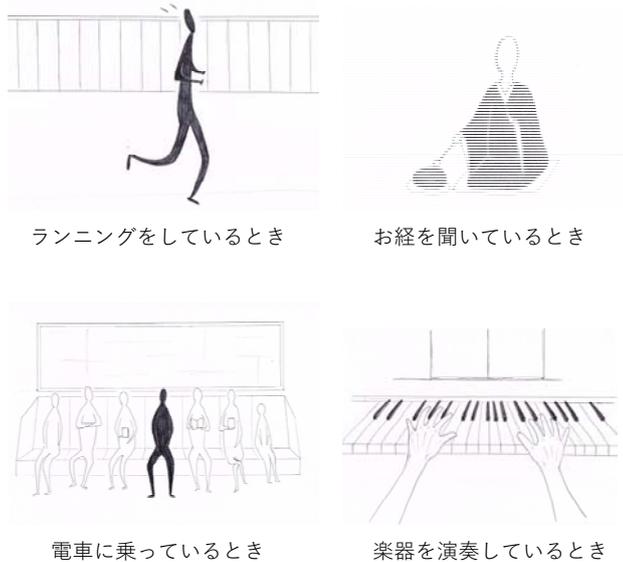


図2：「性質の違う時間が並行して認識される感覚」空間モデル

3-2 オフィス空間における時間

テナントビルに代表されるオフィスビルは、機能性を重視してつくられた建築であり、その内部空間には均質な時間が広がっている。それはどんなテナントが入っても対応できるような均質な空間を意図的につくっているからである。また、現在の東京では、東京オリンピック開催決定を契機に、多くのオフィスビルが建設されているが、2018年からこれらのオフィスビルに深刻なストックが発生することが見込まれている。本研究では、現状のオフィス空間の時間性を応用し、2018年以後のオフィスのストックを活用するコンバージョンとして提案を行う。

3-3 設計手法

オフィスのグリッドで構成された空間に流れる時間を a の時間、太陽の動きや敷地周辺の環境から採集したリズムを b の時間、施設を利用する個人が感じる時間を c の時間と設定する。b の時間として設定した要素を構造化し、複

数掛け合わせて既存のグリッドに挿入することで生まれた新しい、時間的なズレを含むグリッドを基準に設計を行う。

時間	性質	要素
a の時間	恣意的で均質な構造を持つ時間	オフィス（グリッド）
b の時間	構造が自然から発見できる時間	太陽の動き・敷地周辺の環境から採集したリズム
c の時間	個人の体感時間	施設利用者・私・あなた

図3：時間の性質と要素の設定

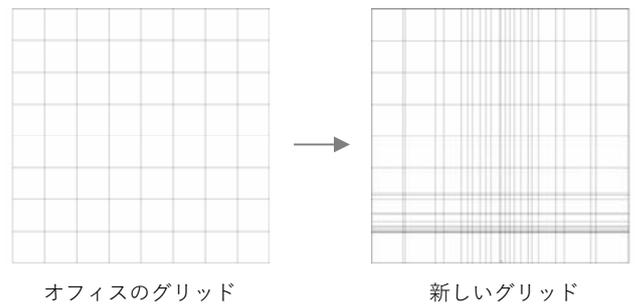


図4：グリッドの操作イメージ

4 章 設計提案

4-1 敷地・用途

敷地を、東京都千代田区外神田 2 丁目に設定する。神田川沿いの都道に面し、湯島聖堂の隣に位置する。既存のオフィスビル 2 棟をコンバージョンし、図書館・作業スペースを含む複合施設として利用する。



図5：既存ビル5階からの景色

参考文献

- 1) 中村昇：ベルクソン＝時間と空間の哲学,講談社,2014年
- 2) 橋本 毅彦,栗山 茂久：遅刻の誕生—近代日本における時間意識の形成,三元社,2001年
- 3) 真木悠介：時間の比較社会学,岩波書店,2003年